



~ 13
3101
3



門 13
3101
3

金示

得瓶 仙蛙奇録卷之三

第四回

東都 爲永春水補綴

術と施と道人胎子と救ふ
恩と報と忠臣君身と換る

當下將軍義詮公稍沈吟ましくけるが南陽子小對ひ足下の醫案明
断分明申て悉奇々妙々なり。嬖々の齡る不嫩けき。小兒の亦も得る
夏の有るきく。云へ是れ天よりと與む。緯る世が窮て得ると云。嗚
呼る業の似しきども。火急の折れ臨んで無益の周諄の女々しき心な
去來速く術と施と胎子の生死いとすれ角まれ阿嬢の命と救ふ
アと只顧命ありけれ綾の臺重き枕の頭と擡げ玉ひて否とよ君の
慈愛をて妾の命と最いと格と胎子の換て資んとの御意は定ぬ畏れと

昭和九年
七月三日
晴

如何せん君の御齡既の不惑と踰る玉の御世嗣の若公も未だ
 まはた適妾が身宿玉ひ若君と倘愆て失ひまひらせ。這後御胤
 君のまきののまへ臍と嚙んでも詮みくく。妾が命ハ風の前の燈火よりも
 尚果敢り。秋の艸葉の措露の脆くも這処の消果るも。世嗣の君も
 不在さ。萬歳不朽の幸福なり。天下の爲民の爲世上の歎き思ふ人
 何卒妾が命を縮め和子と救ひまひるまじと。息も苦き惱の中にも國
 家の換る御命子と愛しむ貞操苦烈兼りて南陽子も涙の針を取
 敢て將軍の兎角の北の方の御色香の愛させ玉。如何せん
 救ひまほく。子小換て阿嬢と救へ。再三まらて御説然れ。綾の臺
 一切兼引玉の疾々妾が命と断て和子の命恙なく。早く平産有らせ
 よ。とむらして宣ふ將軍美益公の這うのと。陽也断思玉へ。陰也

含む哀傷の愛慕の情の多き方にて是非及びぬ天命機敷心の
 俣の世の中の富貴ハ已が随意なれ。任せるの生死の海と隔る物
 思ひ泪障りかきこれ玉。北の方も涌出る。涙の瀧の玉も。袖の淵も
 ま悲し。身の苦も何ら。閻路小迷ふ思ひ子の。初聲さる
 聞あへむ。顔も見あへむ。現身の世と徒ら西の天迷ひ入る。月の影
 たる。落る身の果と。君の名残の床の山。比翼の枕さ。跡も空
 き世の中の真愛の限りと聲立て。と啼音の聲細り。悲歎かせ
 哀傷憂苦の五臓忽ち脳乱と。苦とむらり小眼と睜り。手足と悶へ
 苦し。玉。南陽子まみり。名残の尽り時延。御二方の御命も
 俱も尽んと諫めまげます。苦し。玉。綾の臺の御心下より雪を束ね
 肌とさりと刺下も名醫の針術奇る哉。忽然と産門ひらき。

玉と欺く若君の初聲高く平産あれが御母君の苦惱もろ。眠る
 如く果玉ふ三千界の悲しくと。一天四海の悦びと。一時の來る上下の
 哀樂交雜る其中の誕生有る若君の眼秀て面清く尋常の
 嬰兒の勝まで。通れ足利の御世嗣と悦び勇む計りなれが將軍の
 南陽子が希世の大功賞せむの有りきと。變良應等閑るが
 あり。御母君の胎内へ卸せし鍼の氣と受て。頭腦の陽大聚會され
 御成長の後怒りと抑へ恬淡無為の教ふ浴し清心の行を修し
 玉の心んが必む心火逆動して。頭腦劇しく痛む心ふりけて勤王を
 時々申上ぐ。恩賞をも受む袖と拂て出去けり。此和子則
 今の相國義満公是る。然るに此度の御異例に此時南陽子が

説る如く胎中の中より針氣の頭に残りて散せざる上直又逆意の
 一戦憤怒の心氣を勞らし熱勢漸々上の衝て日々夜々苦惱と
 増せ救ふ良藥有る変る。然るにも又吾の傳る神術有り是
 を換命の法と号く。今誰のあま天下の爲國家の爲小志を勵
 忠孝仁義の赤心とて相國の御命の代る変る。吾儕が傳る所
 法とて勿命と轉換へ。然る時の相國の病惱七日を過ぎ正しく
 快復し玉の換り人其病苦を直小受て落命せん。是將七日
 の間を出し群列の中志有て主君の命の代らんと云者あり。星を
 轉し宿を換へて直小驗を見まき。是又空しく時刻を移さ。救ふ其
 甲斐ありん。如何かと座上を見渡し。聲高やく示し玉ふ並居る
 諸侯列座の群臣星の如く蟻の如く殿中の充滿され。常火

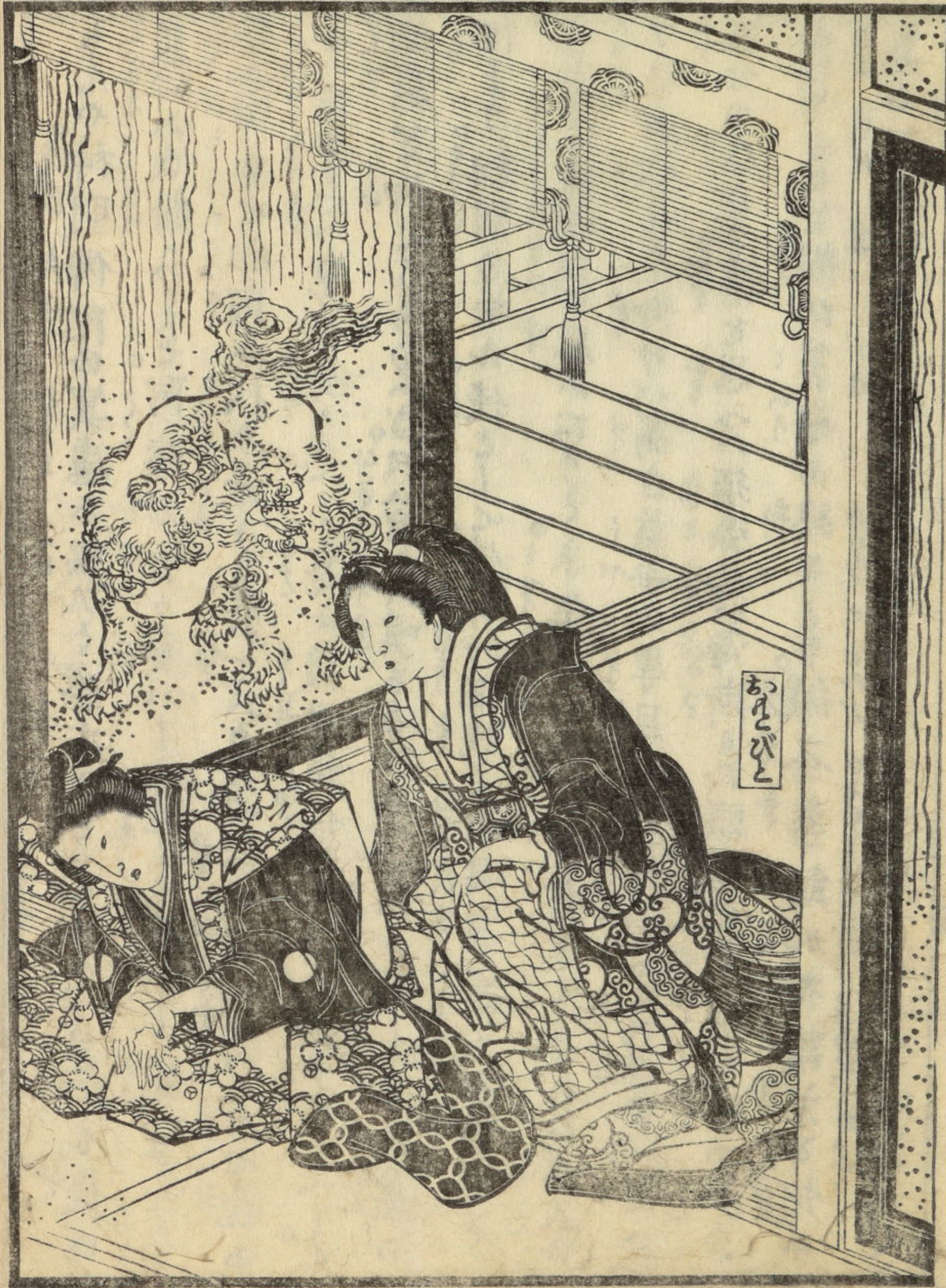
小入り水いりみづ入るとも。君きみの爲ため中ちゆう一命いちめいと塵埃ちんあい比ひ鴻毛こうもう何なに惜おぼ
 まつと雪ゆきありあり。口くちいさき輩たひらも此期このき及およんで。只眼ただめと眼めと首くび合あせ
 口くちと指ゆびと片かた唾つばと吞の醉よめる。如ごとく小茫こぼう然ぜん。時とき小遥さうの末席まつせきより。一
 人衆ひとしゆう小抽出ひきだて。冀ねがはる道人どうじん愚臣ぐしんが一命いちめいと。大相國たいさうこくの壽こと小換か
 奉たてまつり。秘法ひほうの祭まつりり。修おと玉たま。自他よれの大幸たいさい。此この過あやむと悦よろこぶ。小
 下したと詞ことばを。述のる者ものあり。人々ひとびと駭おどりて。是こゝを見みる。義持朝臣よもちあそみの近
 侍とせうじの扈從こしやう小吉川小主水よしかわこぬすみ玄武げんぶと。若わか者ものあり。春秋しゅうしゅう爰こゝ小十九じゅう歳さい容よう負
 閑雅かんがの風流ふうりゆう士し。上うへ小文ぶん小栄さか。武ぶ小富とみ。君子くんしの言行げんこう兼備けんびり。難がた
 臨まりて死し。省かる。元もと是一ひと個この英傑えいけつ。見みる者もの忽たちち取とる色いろあり。道
 人どうじん頻しばしばり。嗟嘆さたん有あり。宣のたまふ。相國さうこく四海しがいの君きみと。衆しゆうと撫育ふいくすること
 深ふかく。民たみと見みる。支子しこの如ごとく。遠域えんいき小至いたる。澤たくと受うくる者ものあり。今いま

せ限かぎりのけ。誰たれ一人ひとり國くに小報かき。思おもひ答こたへ死し小換かるといふ。あ
 まの汝なんぢ小主水こぬすみのま。若わかき身みを以もつて。國くに思おもひ報かき。主命しゅめい小換からんと。忠
 誠せい義ぎ。賞あやりとも尚なほ余あまり有あり。席せきを打うて。感嘆かんとん有あり。小主水こぬすみ唱な然
 と。と決けつと流なが。道人どうじんが賞譽しょうよの御詞ごことば身み小過あや。最もと畏おそく。と覚おぼへ。小
 此年このとし月命つきめいと。數かずさき。思おもひ。是こゝ君きみの賜たまひ。何なにと。報かき。奉
 らん。昔むかし石珠いしじゆ指ゆびと切きり。劉氏りうし已すでに。股またと截きて。親姑おんなの疾やまひと祈いのり。孝子
 烈女れつぢよの勲いさな切きの載のて。唐山とうざんの史傳しでんあり。吾朝わがあそ。大相國たいさうこく清盛きよしげ入
 道の御時ごとき小撰津せんづの國兵庫くにひらの經きやうの島しまと築つく。人柱ひとしら小恩おんの爲ため。國
 の爲ため。若わかき。松王丸まつおうまるの浪なみと。ひさき海うみ沈しづむ。其例そのれい小劣せうること。小
 愚臣ぐしんが命いのち一ひとつ。以もつて。君きみ小換かり。奉たてまつらん。支し何なにの幸さいひ。此この増まへ。最もと願ねがひ
 ま。去さる。遠とほ外とほ。一箇ひとの觀みひあり。某生たがうまと。五ご六ろく支し蒙ま昧まい

魯鈍ろどんの有あり。阿嬢あぢやう朝あ夕あ無な二に北きた辰しん星せいへ立た願げん
 祈誓きせいの靈瑞れいざい有あり。人ひと並なら々々小こ成せい長ちやうとぞ父ちち有ある者ものハ幼よ稚ちの頃ころ小こ我わが身み
 と阿嬢あぢやうと家いへの遺のこり。浮う世せを厭いとひ塵ちん欲よくと断ことち國くにを出いて往や方へを知しらむ。
 唯ただあつらひく恋こひし。思おもひ千ち々々小こ一いち寸すん鏡かみ照てらむ。月つき日ひを父ちち母ははと仰おほぎ
 畏おそむ。心こころ計はかりり。小こ憑たよりも。今いまの甲斐かひなき母はは木き々々の。有ある見みさみ
 鳥とり哀あはれ。吾わが身みの亡な後ごと如何いかの過まが行ぎやう玉たまをらん。心こころ懸かる。是こゝの
 道人だうじん海山かいざんの慈あまと以もつて我わが亡な後ご阿嬢あぢやうの御身おんみの上うへ免まる。角かくも憑たよ
 且かつ余よ所ところる。御暇おんいそぎ乞こふ。御顔おんかほを見みり。見みせり。餘波あまなみ
 惜あはれ申まをす。這こ緜ん如何いかの涙なみだと俱ともに述のたまけ。道人だうじん唯ただ々と打うち領りやうき
 其その所ところ明あきらむ。其その思おもふ所ところ道みちの協あはれ。天てん地ち人ひとの私ひそに。造ぞう化げ必かならむ。心こころみ
 此この善ぜん行ぎやうの報ほうる。野夫やぶ田妻でんさいも海人うみん樵者せうしやも。是こゝを聞きて歎なげき。

らんや神明しんめい佛ぶつ陀だの眞ま慮りよの協あはれ。感かん応おうもどろ。聊ちやうも後ごの
 更さら心こころあむ掛からむ。阿嬢あぢやう刀たう自みづかり。更さらハも宜よろしく扶たす助すけ。宛あてへらん。今
 俗よこ命いのちの相あひ國くにの代しろり奉たごると死しハ一ひとつハ。君きみの報ほうハ一ひとつハ。親おやの
 答こたへへ忠ちゆう孝かうニ。全まごく。一ひとつハ。是こゝ後ご世せ這こ仁にのり。惜あはれ。一ひとつハ。御おん扇あふの
 團だん扇せんを仰おほて。相あひ國くにのおん使つかひと。侍こゝろ女によ一ひと個こ。出い矣えい泉せん道だう人じんの對たいひ。と
 言いふ。義ぎ滿まん病びやうの床とこの。未な生ま以前いぜんの更さらと知しり。道だう人じんの
 示し教きやうの依より。仰おほげ。高たかき慈じ母ぼの厚あつ恩おん。其その身みの換かへ。義ぎ滿まんと此こゝ世せに
 在ある。ひ。惠めぐみを思おもふ。須す弥み蒼そう海かい斯しと。頭づか惱なうの劇げき痛いたも母ははの紀き念ねん
 とお。ゆる。を。殺ころひ。苦く痛いたも終あるとも。鍼はり灸しゆ。餅もち加か持ぢ護ご法ぽうと何なにも
 覓みぬ。何なにも祈いのちらん。今いまと近きん臣しん小こ主しゆ水みづが。其その身みと捐たまへ。我わが命いのちの換かへ。

山住行録



おとびと



灵泉道

小主水

えんあを
君臣相和
まて俱小
せめかろ
生命と怪
んず

まる好意ハ切なる望みありきども假令道人の功力をりく換命の秘法を
 終しゆりとも不徳の身ありて忠孝全き小主水の換んぬ是將天の背
 けるあり唯命運を天の任せ生死を私にまじらざると有繋身を恥徳の差
 天下を思ひ明君の御誼の感ざる列座の諸侯及小眼と眼を見合せは
 諸袖濡を泪の雨須臾晴間ハ見へざりけりそ中ハ小主水の胸を充る
 感涙を止めもびざ小膝を找れ臣等が命一ツりて四海の君代らんを
 玉小比まるがどいん憐の辱さ六肝小彫骨の徹て忘るるハ父とも是等の
 小事のうららひて重きん身を過ちあり天下の歎きのうららん疾其が
 命の換秘法を終しゆひねろしと促まぬ道人余とちり領き世を稀
 りの念が忠誠争う空小中らるるに今日より七日程ハ我行法の終力をりて
 相國のちん身恙なく天下の爲め之が死命を救ひまのせん余ハ一日も速く

故郷小歸り餘処あざり母の刀白小暇とる疾々とさ示を教のり
 き大徳の神力輝く袖袂錦とふる故郷へ立や我身の秋あざり落るるを
 悼む夕風小涼き庭の西桐の葉のいさぎよくさして往方ハ津の國の
 田の面小実る稻妻やとらみき道を文月の教正しき主親の恩を頭小能
 勢の谷吉川の里へと急ぎけり。

第五回

能勢の溪小孝子神助を蒙る
 吉川の菴小貞婦天書を啓く

抑撰津國能勢山と申ハ北ハ丹波小隣り東ハ山城小境ハ嶺高く
 山聳ハ雨過て天青壁小連り潤ハ風來り松玉屏を巻て寒く
 山勢小騰して逸馬の如く水流委曲小して驚馬蛇小似り斯る微
 妙靈山小鎮座ます北辰尊星妙見宮ハ靈驗殊小灼然小貴賤

長歩と運はい士庶し頻ひんり願ねがひとけ登のぼり渉せつの男女なんにょ絶たることあり
 麓ふもとの郷さと小吉川こきちがわと深山みやま隠かくまの一村いちむらあり市いちと離はなれ幽ゆう隠いんの浮世うきよの
 塵ちり小文こぶんらた孟軻もうかが母ははの跡あとを追おひ賢けんと樂たのむ住居すまひ吉川きちがわ小主水こしゅすい女にょ
 武ぶの母はは尼にの隱家いんけの現げ清せい貧ひんと甘あまんぎる心の底そこの水みづ清せいき寛かんの流ながれ
 亮りやう々と目め立たて見みる塵ちりも清せい浄じやうの地ち造つくりみと一箇いつくわんの石いしの祠かみあり
 是こゝれ小主水こしゅすいが父ちちある者ものの建た置おけ所ところ北きた辰しん星せいの靈れい座ざと設しやうけ朝あさ夕ゆふ
 拜らい礼らい急いそりる信心しんじん深ふかきを頼たのりけ此こゝ石いしの禿か倉くらの扉か小遣こづか金かね速すみ
 開ひらけ七しち々つ天てんといふ七しち字じを彫ちやう付ふり然しかども是こゝれ奈何いかんある故ゆゑも知しる
 めのり家いへの傳つたへ女にょ兒にの澳あ水みづ年としも破やぶ瓜うりの青あお年とし折おりも文ぶん月げつ七日にちとて
 星せい祭まつりる夜よの尊そん供く恋こひ願ねがひの絲いと筋ぢんも繫かる縁ゆかりの結むす髪かみ良ら人ひとの都みやこの仕し
 官くわん年ねんの一度いちどの途みち瀬せさへも肌かわもぬ妹いも津つの中なか結むすぶ短たん冊ふ色いろ紙かみさ恋こひ

小このりり振ふ袖そでの年としも十六じゅうろく夜よ女にょ達たちの隣となりと二三にさん町ちやう軒けんと隔へり谷や陰かげの長なが
 六む翁おきなが娘むすめの小こ磯いそ隔へてぬ中なかの小こ娘むすめ同どう志し手て傳つたへる澳あ水みづの對たいひ喃なん澳あ
 水みづ御ご前ぜん你あなたの色いろも香かも人ひと小勝こしょうと身み持もちり親おやの教おしや妹いも昔むかしの中なかと
 餘よ所ところの詠えいと捨すて措そて小主水こしゅすいぬ都みやこより我家わがやへとい歸かへり來きませむ徒た小
 咲さく秋あきの野の今いまと盛さかりの糸いと萩はぎの思おもひ乱みだる花はな薄うすくを靡なくもま
 弓ゆみ矢やの心こころと武ぶ士しの常とことらと増す花はなのうらみ水みづの肌かわ清せいき都みやこ女にょ郎らうの
 見みえり秋あきの扇あふぎと捨すてられて空そらま臥ふ草くさと一人ひとり守まもる後のちの悔くはむ玉たまひ
 とといつて追お追お女にょ氣きの澳あ水みづの赤あからむ顔かほをせと振ふの袖そでと打う覆おひ都みやこの花はな
 と深山みやま木きの色いろ香かえり妻つま以も見みえり玉たまひぬる去さる夏なつまはる老こ年としの
 阿あ嬢ぢやう君きみも在ある我わが背せ白しろ雲うみの高たか間まの山やまの余あま所ところの見みえり過か行ぎやう
 葛くわ城じやうの神かみの契ちがひりの中なか絶たて竟つひの一度いちどの枕まくらさへ縁ゆかり織あ姫ひめの年としの

一夜の逢瀬も深き契の私語尽ぬ名残の衣々も送小思ひ思はれて千
 世もかぎりぬ妹背の中い姫御前の身あわやうと立る操の鏡ゆもこのう
 ぬ心の神ぞ知る心強き我夫と嗔歎け有敷糸おも諫ぬる彼小儀へ澳
 水が背と撫ささる。介抱るる其拍柄隣村に住居と。劍術指南の退
 糧者其名藤倉勇藏とて直ゆゆぬ鳥葛心も曲る侍人日毎來
 尼が菴室影を見るより小碓のさりく。頃日く著る廻る澳水さぬと口
 説く勇藏が折悪ふ又來りぬ。妾の往て又今宵星祭る頃來て遊び
 さんと夕顔棚の櫓の妻引違ふ入る藤倉を見て見ぬ容小奥の方逃
 入らんとさる。澳水が長袖と片手取て傍に居寄り。朝夕見ても麗き
 色有る花の詠小飽をさかき立寄る樹の下情の色に露計りう。いら
 め強面枝がりとけの是非とも手折る心。此長き日小主の尼の姿の見ぬ

ひるねの床より夢見まゝ新枕初陣の組討ゆも痛いまさぬ奇妙の
 手練手柄の仕勝と引寄せて雪るま肌さく入る。手首拂て膝行退き主ある
 園の足と入れ人の譏も世の義理も辨へ知らぬ尚よりあまの口説き身の
 厭ひねと。劍術指南と武士の業と教て人を導する。身あふ不應横恋
 慕不良人と門弟子小見落さる。用ひも薄き身と心で嗜む玉と
 言てくともひるまき蛙の面の水車横に押ても跡に引ぬ心の丈の富
 士淺間山下り高ふ立烟り。咽ふ思ひの恋の淵深ふをり。吾執心は
 る情を余所ゆくと都の花の詠ぬ我家へと歸り來む。浮氣小
 過る小主水操立る馬鹿貞女近曾聞ハ六糸の花巷名高
 き遊女を購ひ出して圍ひ措き夜毎日毎の仕官。室町殿の御氣
 色蒙り縛り首欵追放欵何と永きまるとあつと巷の風説尊あり

山姥奇縁巻之三

去る水臭き男とあかれ。可惜盛りの朝日と虫の喰むる不了簡入梅小
 醜る其内股と土用干よりま。打晴し吾身の随ひ任せる。栄曜栄華
 心のま。熟切る姫瓜の初物喰ふ。今日が日盛り。願ふてもなきよの朝
 合とよまらり。取り取る。手と漸の振放し。聞入ぬ身何時までも同
 言ふ無理口説野の捨らま。伏花も道と守る。女の常結ぶ縁の
 下紐と。余所のころぬ身の嗜む。二道とる。淫婦と思ひあやまち空骨折
 你的名とみ下し玉ひぞ。母まの目の覚ぬ間。疾去り玉へと身を背ける
 艶麗さ雨の傷める海棠の色と含めて匂ふ。如く。看蕩入る勇蔵ハ
 魂吾のる。心地尚いざり。寄引よせて。いづの強面ま。斯まで思ひを
 けり。其否と直の止む。有らんや。主の尼ハ其ハ舊恩深き家
 來筋。今と明せ我本名。山名土岐五郎國範と。父但馬大掾時國

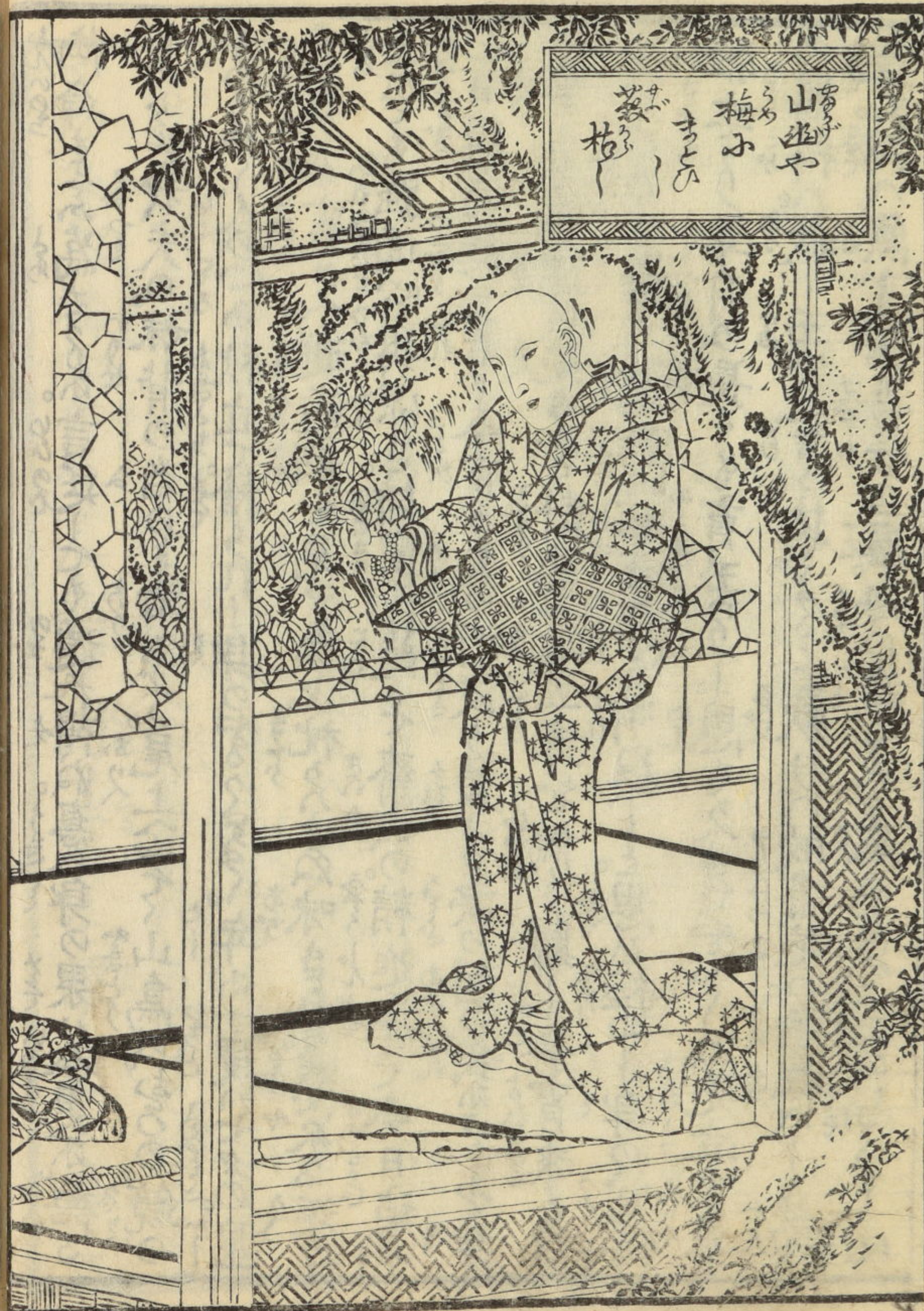
る者。多年の宿望達せむと敢て亡失玉と。吾又大志と。日月の抱て
 折よく。足利の天下と并吞きんとき。然ある時ハ將軍你ハ御臺
 戀の答ふ出世の緒加之某が日頃此菴。訪來る小主水ハ父篤之進
 真武と。吾父時國ハ仕誠忠無二の者あり。主と捨妻子と捨遠
 國。狼狽者。家出る。往方ハ志ね。家ハ傳る。兵家の秘書。八門
 遁甲七星の卷隠し。持て此所ハ潜居る。主の尼底意を探り。讓受ん
 我念願。七星の卷。手ハ入り。諸將と商議。旗を揚げ。足利の天
 下と傾け。四海の主と成る。某上見ぬ。鷲の心の儘晝夜とる。此比翼の床
 入枕並。輝初め。卧簟の初陣。今爰。情の切味試る。今道強面心
 引く。可愛相公と。見せん。此傍玉と引よ。まると。逐と鷲の
 鷹ハ追々。如く。腰もあ。桃合。折る。後の蒸襖と。推開て立

出か主の尼の土岐五郎が襟髪櫛引退れ起くる澳水とやらと尚
 とむ頭をのりて丁々打も巖まき扇の手先をうと曲て眼を瞞
 大思有る古主の對ひ無法の打擲慮外の奴殊小年來望とる八
 門遁甲七星の巻隠持りて居るら小我の渡る物客娘澳水の豫
 ての執心此上の一口商ひ兵書添添澳水と渡し我と主人と仰げよ
 然るく己と打殺し兵書りとも澳水と連行き今日より我女房否
 應二ツの回答せよと突をるせ皎月尼らむ目ぶ小泪と浮り無法者
 とらとるこの事我夫吉川篤之進數度の諫と御用ひ終ぬらるる
 謀反の企支成らむと滅亡有く父君の御家名と引起し玉兒との成
 玉酒小乱と色小迷ひ道小宵き心と縦令兵書を得られんとて
 常言ふら猶小黄金世と見限り我夫の往方知れぬ一巻の在所

と見る便もる益なき事のみ宣ひと嘲りいづくの土岐五郎數國荒く
 飯初の詞ゆ我と否まら雜言過言堪忍びも切成る戀と叶ん爲
 ニッ小の又七星の巻取得る迄にとく入簡もを赦さぬ覚悟せよと
 抜り及と皎月尼胸元近くひらめく澳水の元より一巻を手渡しせ
 むの生死の境ゆめと攻問へ皎月まらむらひと七星の巻は在り
 所あれぬが渡まきやもる澳水の主ある女子るまのる操汚さる
 へきと聞より怒りの土岐五郎命根さる腐尼生死ニッ你が返事心
 一ツの定所と澳水と引著皎月尼が咽元刺んと取直ま又持手携
 つき澳水の涙の聲も夫程追ふ思ひ込切成る恋小迷ひの紐は結
 好意と仇の受ねも晝人目の関も有る子過ら頃小來玉と今
 宵逢瀬の七夕話星の契ふあやうと二ツ並ぶ新枕身と任ま上ハ

阿嬢さるの御命の赦してと伏拜む意のらる色之ぬ本と常盤の
 故事の鳥羽の恋塚身ふて阿嬢と良人の命とまふ昔と忍ぶ物
 思ひ詫り手先と握り詰苛ふ迫るも恋の欲叶る回答聞き手荒く
 まる心る落花流水互の胸の念ととる夜半の鐘重て訪ひ否の
 言さ誓ひの背ふ二人とも冥土の旅立心く菅菰のよままで三
 布小寐て待ねるを詞とま心残くと土岐五郎表とと出るがら
 何心小點頭てを萩茂る小柴垣の影のくろひ忍びひけり跡見や
 ろく皎月尼の海一決ふ打をれ澳水の對ひ聲をのせゆるその苦
 勞のけり上今宵小迫る危急の手詰土岐五郎が無体の恋慕言
 遁れらるるこの心操のらぬ丹心の疾よりあれどのあて後の患へ
 と拂さき心構への有やんと問を胸の苦ささと深く包とて母上の

御命まふ為ちの言延しても遁れ得ぬ憂身の果は今更も語る
 もつらき我夫の妹背の名のく有る尾上へぞく山鳥のあらの鏡の
 うりも人の心小秋立て捨られ身のおろくも年一度ハ七夕の星
 の契の今宵さ邂逅顔を見せさる枕の味さる我家小返り
 王ひても強面心奥深き持室小籠りと齋戒の精進立と今日迄の
 七日限りの徒の暮一今宵の天の河渡り兼さる涙の雨の我の身
 の幸さ思ひ絶ると計小土岐五郎を偽り歸し今宵來らば
 彼人の双小懸り消行の妬き怨も晴然と思ひ極め一身の覺悟
 雅立より年月の長くも育玉り一思も久まきと先立不孝
 の罪科の赦一玉と言うけてよくと歎け皎月尼の物狂の聲
 立て扱へ然まふ吾子の事母の事まで氣あふて思ひ細り心



山やま 梅うめ 小こ
花はな 松まつ

仁野音金卷之三

と。知らず過り悔し。此文月の朔日の夜も曉か頃家の
 返り小主水が深く願ひの筋有ハ七日の中ハ物忌の一間の内
 阿嬢も女房も入と誓ひ夜も子過る頃小起出て庭小落来
 谷川の瀧津流の垢離を取り清浄心小身せら。祈る小其方
 阿嬢も語らぬ我子の所存奈何願ひ知ねも命を捨て
 阿嬢の為良人の為とあこがる女心と白地の想像多き無得心に
 得もと思ひあがも元小主水の産までより五六歳まで起卧も人並
 らぬ柔弱魯鈍育てかひき廃人と他人の譏を親の身小不便余
 る思ひの余り此高峯の鎮座在す北辰尊星妙見宮へ断食
 て七日の祈誓何卒悴が柔弱魯鈍を平愈さすめ玉と祈奇
 瑞の顯まで人小超る器量發明偏小妙見尊星の御利益の程有

難く忘る際ある折る管領斯波の義重朝臣此津の國へ雁鳥狩
 の序此庵へ立寄り玉玉ひ今も谷陰を捨ひ得る女
 子の容負氣高く美麗の生れ連返り我子とく育上ん最易けれ
 ど従者の手ま世上の思ひ今より汝小預る間小育上げ
 行末小主水の娶合せよとの御頼殊小我思ふ所此方より沙
 汰るまでハ音信不通と堅き約束実の父母の名所も知らぬと證
 据との添て有護身囊隔の女兒更を小くと思ひれて
 其方の実の父母より義重公も義理立を我子より小主水が所
 存と乳との上を其方と夫婦の事斯波の大人も往昔も
 一言と喰ひ小似れば早まり夏玉ひを深き所存の有るうて十
 六年前家國と捨下往方の知れざる我夫篤之進殿の家小在さば我

身へ元より其方小ま。斯る苦勞へ見せずと儘せぬの世の中の義理と
 忠義の土岐五郎が無法とありま。我夫の古主と言名の刪らま。とて
 とと語るゆ。澳水の涙小むせり。斯ま。厚き御慈悲の情と仇の怨
 言ゆ。と玉の阿嬢と。勸解る女兒の手と撈て共降る秋雨の妻
 とふ鹿の聲添て。哀れ弥増折うらふ。噫と一聲苦む物音。驚き周
 章母娘。多寄り開く一間の障子。注連引ま。齋戒の菘の上小
 主水の手足と震ひ虚空と見詰。苦惱の迫る形勢。背撫さまり立
 り居る。芳る兩人が顔打守り。いとも苦き息とつき。母の悔澳水が歎
 委しく聞て最前より。骨身小なる慈愛貞節。肝小答て嬉。身
 小餘も今日のゆ。追深く包。吾大願。今と語り聞ま。扱。此
 度大相國。義満朝臣の御異例。日毎小重らせ玉。程小室町御所

の上下の周章。い。評義の折。靈仙道人とら。不思議の神
 仙君の御命小代る忠臣無二の者。命の法と行ひ相國の御命と
 正しく救ひ奉らんと。仰小随ひ。數萬人の其中より。望んで出。其命
 さ。忠義の一心。生有る内小母上。妻小密小餘祈る。暇とと
 日限玉の。七日小満る立願の。今日小限りの身の上と。知らせ玉。阿嬢の
 御恨年頃育の思せも。送ら。空しく果る不孝の罪遺憾。種と別
 ち。父の面影も。往方も。知ら。徒小埋と。家と興。得。身。成。果。の
 と。思ひ。二世。良人。思ひ。今日。心。尽。せ。澳水
 が貞節。忘れ。去。枕。身。の幸。縁。と。求。め。身。と。せ。身
 の納り。と。怒。尽。名。残。の海山も。忠義小換。命。と。思。ひ。諦。め。玉。と
 と。聞。より。阿嬢。の堪。ね。て。歸。り。日。より。引。籠。り。人。も。逢。ぬ。齋。戒。の。深。き

願ひの故ありぬと思ひよりも、跡増て天晴勝、忠臣小家の秘書を
 傳へて、這世と去らば遺る身の老行末と甚麼のせん遺憾やとむ
 せらる。泪いといふ谷川の岩切通行水も漲り落る如くあり。時こそよけ
 と柴垣より、願と出らる土岐五郎、同寄て聲荒らげ、まの命小代え
 むら世と馬鹿を、空氣の、小主水が狂ひかゝる。あゝ心地より此上、慥
 置らる一卷を母も疾々吾も渡せ、澳水の深く欺。怨の有れを恋
 小折と出るも得手勝手。小主水が死失ふ。若後家ある上奇貨
 土岐五郎が手活の花い。とてとてと引寄ると、母と椽側、椽と
 蹴倒、澳水の腰帯解らる。出居の柱へ高き小手小縛上れ、
 喃るやとる娘と真の當吐と倒り姿と見や。春の柳の雪持て風
 小まろく艶優さ、本得心の寐姿を賞翫する。今此時と立寄る足首

小主水が苦き中、この引戻せんと蹴く。小面倒る野郎
 奴と片付て、後の事先已らう観念せんと小腕引立谷川の流へん
 かと投落せ、と立ち、水烟り顔、うりて心付起立、澳水小主水が
 ころろと女と見るより、と玉消(驚多)最惜やと立ち、えとさる。
 裳と踏と、澳水が帯際引つら、と引ま、阿嬢のりとも、椽の柱へ
 々、つ母と引立、算の元、兵書の在所、明さ、然る、斯と見
 の口より、落来る水責と轉八倒八寒地獄も眼前、土岐五郎の聲を
 荒らけ、苦しい疾在家と、又奈何とさる。皎月、尼昔痛のさる
 たりも、在家と知らぬ、兎も角も、夫と俱、行衛る。秘書と何國隠
 へ、長く夏苦と見せんより、我子と與、死手の旅、連立行かせ、ての樂
 疾々殺せと身とあせ、次第、息も絶果て、りくも終る死骸と、丁と

足と傍へ疎遣り。む骨折せ。瘦尼の代り遺る。澳水の君と徐々
 立寄引か。此年頃の積り。恨情で歸さ。今宵の逢瀬否とい
 小主水や尼れ。同じ冥途の道侶。奈何ぬくと付廻さ。又先と
 身と。身と。身と。念の入り。極重悪人。喰著る。も此恨も暗
 措き。柳眉と。煮りの顔。是迄あり。土岐五郎が
 切込。身と。甲斐の女業。深ふ肩先。二三寸。切下らして
 仰向。倒れ。這寄て。閃く。又。両手。搦ん。息と。つき。親子夫
 婦。極悪非道の。手か。空しく。果る。身の。悲。殺さ
 殺せ。夫の。敵。仇。身。八寸。此。場。を。通。さ。あ。疾
 猛。逆。女。氣。も。深。癩。の。身。の。苦。空。吹。風。と。打。笑。ひ。人。我。小
 つ。け。我。又。人。の。習。ひ。是。も。慕。ひ。我。情。強。面。あ。り。の。

飽まで。我。恥。見。せ。つ。る。報。と。今。こ。と。思。ひ。知。ま。と。髪。つ。ら。ん。で。子
 手。の。提。げ。雪。の。肌。氷。の。刃。さ。つ。ら。ぬ。け。ハ。忽。ち。の。苦。と。叫。んで。手足を
 苦。痛。不。堪。ぬ。蹴。返。さ。裳。小。紅。の。ひ。ま。より。見。ゆる。白。妙。の。脛。も
 血。汐。小。散。ま。ぶ。紅。葉。を。流。さ。谷。川。の。流。の。辺。り。追。迫。り。胸。下。膳。乳。の
 下。まで。三。寸。五。寸。の。み。ぎり。切。苦。む。聲。音。遠。山。の。妻。を。ふ。鹿。の。聲。添
 て。哀。れ。ら。る。き。断。末。魔。次。第。小。より。倒。れ。と。乗。ら。ん。で。十。々。滅。の。刀
 肝。の。こ。ね。刺。貫。け。鮮。血。流。れ。て。谷。川。へ。落。れ。ハ。水。勢。忽。ち。漲。り。上。る
 音。凄。ま。ま。く。滔。々。と。岸。を。浸。せ。不。測。や。天。地。鳴。動。と。遙。の。聞。ぬ
 る。三。更。の。鐘。り。も。北。天。より。清。々。と。北。辰。星。の。光。と。お。や。い。く
 赫。奕。と。一。道。の。光。氣。散。乱。封。ト。せ。る。石。の。祠。自。然。と。開。扉
 の。内。より。七。星。の。卷。片。手。の。さ。げ。飛。で。出。る。吉。川。小。主。水。土。岐。五。郎。の。肩

口擱んで水の深々七八間と投込水音の驚き起立母の尼身
 の恙なき形相これいと計り兩人が霎時呆まて忙然たり小主水四
 下と倍と打やりある不審や暫が程病苦のみむ其上の土岐五郎が
 非道の責小空く成一と思ふうち夢現とも命に惚身健固の病
 苦を忘れ日頃小増る快力の正しく北辰妙見靈驗必有るうと勇
 心詞の皎月尼等しく觀喜の聲高く應吾とて其如く土岐
 五郎の苦あらま死せしと思ひ水責の苦痛も覚む健小り
 の夢より其上の金の遭て速小開く七々天と彫付玉ひ父の紀念の
 石室開け内より出七星の巻ハ則我夫の十六年以前今月今宵
 の支せり。知て封籠置玉ひる。未來記るうと聞より小主水
 とて手と拍ち。當る哉阿嬢の一言七月ハ是秋の初秋ハ西方金

氣を象り殺伐を司る且今土岐五郎が及みりて死する澳水ハ十
 六歳まで至徳二年の生とるれば是海中の金性なり其生血りて
 水氣と激し逆巻上る勢小自然と開き石室の此一巻も金の
 數七星の巻と称するハ北辰守護の破軍星七ツハ象る兵家の極
 秘七月七日ハ七々の金の金の數と合して開く七々の天の賜父の
 大恩吾ハ今年十九歳永徳二年の産中て是大海の水性なり
 金生水より五行の理數北辰星の主座在り北方玄武水の威徳
 吾小主水の文字ハ直小是又水と主なる玄武の訓と返せば與小應
 今此時子の刻ハ陰の極數陽氣小歸る北方の女を象る坎蓋
 水澳水が水の底清き貞女の血沙金氣の相生吾と助し積代
 支偏小是北辰尊星妙見宮の御利益君の恩澤父の賜母の恩



小主水

山崎五郎卷之三



忠貞の
誠心
天に
地を
感動
せ

玉岐五郎

小主水

山崎五郎卷之三

妻の操一時の受けし我洪福慶喜此小益喜る。わら有難や嬉
 る名と高根の方を遙拜し踊上りて勇けり流るる落し土岐五郎
 り沈り川下よりおき上りて馳返り。此体見より仰天し死せしと
 思ひ小主水が堅固の上小尻めまで不測の蘊生の心得ごと。由
 るま已門よりへの澳水の及で殺せり。あゝ盛の花を散せ。遺憾
 も俣るる浮世の暇せり。せめてとんと切てくるを小主水が二上二下希
 代の手練何よりけん小主水が取落しる兵書の一巻取り。早
 く欠出にせ。後袈裟の切させ。のけり。あゝ彼処の山石へ丁と扱と
 ば土岐五郎が流る血汐と。ろとも再び水勢激動し。逆巻飛散
 水烟死する澳水が惣身へると等しく岩頭。まろくと起立一巻と手
 の取揚て押戴き土岐五郎が及り。死せしと思ひ夢の中妙見宮の

御告めて暗誦し兵書の機密七星の巻と号し紀原へ負狼巨門。銀存
 文曲武曲廣貞破軍七ツの星のあかり。初へ則金の數是殺伐と司り
 武徳と以て天下を治る兵家の要領是ありと。知ろし召しよ我夫とさ
 と押開く一軸を小主水逐一讀下し。尊いる吾父の教とトき軍法
 の秘笈の忽ち掌を指が如くの口受極傳。其久死する澳水まで再び蘇
 生るるも妙見宮の希代の靈瑞を畏しと夫婦左右小立別と互ひ
 會得の軍略秘訣母も勇の言をきり。いさ覚りし小主水澳水へ妻
 ぐるる新の難問説くや甚摩のときと寄り。夫八門の數々の夫を易
 き御尋ね休生傷杜景死驚開中なる休門ハ坎小象り水のある是
 言めんと玄理とつむ兵家所謂一の真秘生開二開ハ大吉と良小象
 る此門よりきむと攻む取ら取ら勝縦々金城石門も向ふ所

とく破さずと申す。早速の答へ皎月尼然ら死驚の二つは
小と再び尋る詞の下澳水もとも進出此二つ函中く死の坤より驚の兌
小よ此二門より入る堅甲利兵もきむ支あつて忽破まて敗走る
まが退き守るよ。此他景杜傷の三門用ひ所當否ありと弁舌よ
いふ應答ふそれと起立土岐五郎とひらりと切込小主水が刃の光
澳水もともみつと突込恨の切先叫とわりの身とりき虚空を掴で
死てけりある快潔と悦ぶ向之土岐五郎が弟子とらるる無頼子
黨と結んで大勢が道さ下めと聲々小尼めと野郎に打殺し娘計り手
取中跡で銘々廻り取疵を付ると言ひ動揺めさ皆我先小と乱入
は心得とらと夫婦が早業切立ちまて野武士ども口も似合ま道け
出まを何処まともと追りつ後の一間小優美の声音詮ま長追ひ無

用り吉川小主水夫婦の者小對面せんまと呼まらふ小主水澳水へ
馳戻り信と見ま紙門を左右へ押開り立出玉ふ斯波左京大夫
義重の夫人操の前徐々小進み出玉小主水は且驚き且敬まひ
頭をさげて不慮き斯波の夫人夜陰の來臨不測の拜謁いふ
くこと得と平伏まはる操の前小主水が無二の誠忠靈泉道人
感激深く救命修法の著く相國の異例即時小平愈せしめり
道人の教小随ひ妙見宮へ御代参の爲妾夫義重の名代とて
朝まき都を出て宵の程より登山る御神前小通夜るやが
奇瑞の靈夢を蒙るのり子刻の鐘聞とひとく御山を下り裡
道より忍ん心始終の容子を聞り嗚呼忠る哉小主水貞ある
哉澳水其方夫婦尼公まで身小過る危難と道ま其上君の

御命みことの換からんをせし病びやう苦くとてさるる是こゝ是こゝ當山とうざん妙見宮みょうけんみやうの希代きだいの
 靈驗れいげんうまひを。豫よて聞きく澳水あまみづハ吾夫わがみづこ左京大夫さけいだいふ義重よしむねの拾ひら
 子こゆと小主水こしゅすい小妻こづめあつせよと約諾やくだくありしと幸あはれる哉や今いま両りやう
 人ひととも一旦死いつたんしと蘇生そせいありしと元もとの小主水こしゅすいゆと小主水こしゅすい
 あらねば古主こしゅとりと土岐五郎とぎごろうと討うちとりども何なんのさるる古こ又また
 んの妻つまが誘いひ館くわんへ連行れんぎやう緯いの顛てん末すえ義重よしむねぬく聞きくあがりしとあて
 婚こん義ぎと盪たがふ妹い背せの盃さかづきの中なかある妻つまが媒まへ介けの疾はや々と手てを取と
 且かつハ二人ふたりの喜よろこび立た上あり母はは小暫こしばの暇ひまと告つげ操くわだの前まへ小引こひきとて者ものを指さ
 て急いそぎける。

天竺てんじく仙蛙奇録卷之三
 得と瓶びん 辰

